

高等教育における「乳幼児の養護と教育に関わる科目」の 教授のあり方

—演習科目の効果的な内容と授業形態—

“Infant Care” at the post-secondary level

— Effective contents and forms for classes providing practical training —

福永 知久
(Tomohisa FUKUNAGA)

Abstract :

This study focused on the “Infant Care Seminar I” class, which provides the foundation for teaching “infant care” in the Nursery Teacher Training Course; sought to clarify the educational effects of the class content, along with future challenges; and explored teaching methods. A group survey was conducted wherein questionnaires were administered to 69 students who had completed the “Infant Care Seminar I” class. The results were analyzed using descriptive statistics, a goodness-of-fit test, the Mann-Whitney U test, and Fisher’s exact test, and $p < 0.05$ was taken to be statistically significant in a two-sided test. The results indicated that “Infant Care Seminar I” enables students who have not yet developed a concrete image of infants to learn about them, and simultaneously, the course content enables them to sufficiently acquire the necessary knowledge in accordance with their desired future occupation. As a means of overcoming the challenge expected to be posed in the future by “individual work” and “presentation” classes, which were evaluated poorly as effective class types, it is essential to reconsider their objectives, content, and structure and create more meaningful classes overall.

キーワード：乳児保育、乳幼児、演習、教授方法

Keywords : Infant care, infants, seminars, teaching methods

はじめに

現代の日本社会では、少子化に歯止めがかからないなか、保育所のニーズは年々増加している。認可保育所を利用したくても利用することができない保育所待機児童は、バブル経済が崩壊した1990年代初めには、共働き世帯が専業主婦世帯を上回り、保育所を必要とする親が増

え続け、依然として大きな社会問題となっている¹⁾。なかでも、2017年の待機児童数のうち3歳未満児が88.6%を占め、そのほとんどが低年齢児であることがわかっている。また、保育所等利用児童数は、0歳児が14.7%、1～2歳児が45.7%であり、その利用率の経年変化を見ると、利用児童全体もさることながら3歳未満児

が増加の一途をたどっている²⁾。国はこうした待機児童解消のために、「待機児童解消加速化プラン」を計画し、2013年度から2017年度末までの5年間で、50万人分の保育の受け皿を確保し、待機児童解消を図ることとしている。このプランを確実に実施するために策定した「保育士確保プラン」では、2017年度末に必要な保育士数を46.3万人として、新たに確保が必要な保育士数を6.9万人と試算している。その上、「子ども・子育て支援新制度」により、地域型保育事業が認可されたため、今後は3歳未満児を対象とした小規模保育や家庭的保育がますます広がっていくと予想される。保育の受け皿の拡大を支え、乳幼児の養護と教育の担い手となる保育士の確保は急務であり、保育士に対する処遇改善の実施や、保育士養成におけるきめ細やかな指導、保育所への就職促進や支援などの取り組みが行われている。待機児童が著しい大都市においては、乳児の保育に係る保育士の算定対象として看護職の活用も進み、保育現場の質の向上にも貢献している。

このような状況のなか、現場のニーズに応え

る保育士育成の一端を、指定保育士養成施設が担っている。厚生労働省は、指定保育士養成施設の必修科目（必修24科目、選択必修8科目）において、教授担当者が教授に当たる際の参考にするために、「教科目の教授内容」を示している³⁾。この標準的事項に則り、総合的な判断力や実践力を習得できるような授業展開が必要であり、知識・技術・態度の基本的な内容の教授が、講義、演習、実習という授業形態を組み合わせ、多層的に行われている。そのなかでも、現代のニーズの高まりに最も当てはまる科目として、「乳児保育」に注目したい。「乳児保育」は、3歳未満児の保育を行う環境や、3歳未満児の発育発達に応じた個別的な保育、保護者や関係機関との連携について展開する学習内容であるため、講義形式による知識・技術の習得には限界があり、演習科目としての位置づけが大きい。しかし、こうしたニーズの高まりと共に、「乳児保育」の重要性が認められながらも、授業内容や教育効果について詳細に検討した研究は少ない。これらのことから、本研究では保育士養成課程における「乳児保育」を教授する上で、

表1 「乳児保育演習Ⅰ」授業内容一覧

回	授業形態	授業概要
1	講義	乳児保育の基本と役割、現状と課題
2～4	講義	3歳未満児の発達と保育内容
5, 6	個人ワーク	既習の乳児保育の実際について各自調べて発表原稿作成
7	発表	乳児保育の実際発表会
8	実技	乳児の生活と保育(1) 抱っこ(縦・横)、おくるみ法
9	実技	乳児の生活と保育(2) 着脱、おむつ交換(紙・布)
10～12	グループワーク 実技	乳児の生活と保育(3) 情報収集、実技練習、発表原稿作成 ① 哺乳瓶、授乳前の取り出し方 ② 母乳・ミルク、調乳法 ③ 乳首、授乳と前後のケア ④ 授乳後の洗浄・消毒方法 ⑤ 離乳食 ⑥ おおい紐、ベビーカー
13	発表	乳児の生活と保育(4)発表会(前半)
14	発表 講義	乳児の生活と保育(5)発表会(後半) 母子健康手帳、発育発達とその評価
15	講義	保育所・家庭・他機関・地域との連携

表2 厚生労働省が示す「乳児保育」の教授目標

1	乳児保育の理念と歴史の変遷及び役割等について学ぶ。
2	保育所、乳児院等における乳児保育の現状と課題について理解する。
3	3歳未満児の発育・発達について学び、健やかな成長を支える3歳未満児の生活と遊びについて理解する。
4	乳児保育の計画を作成し、保育の内容や方法、環境構成や観察・記録等について学ぶ。
5	乳児保育における保護者や関係機関との連携について学ぶ。

その基礎となる「乳児保育演習Ⅰ」に焦点を当て、演習内容の教育効果と今後の課題を明らかにし、教授方法を検討することを目的とした。

1. カリキュラム上の位置づけ

指定保育士養成施設の私立A大学では、厚生労働省が示している保育士を養成するための教科目「乳児保育(演習・2単位)」を³⁾、1年次履修の「乳児保育演習Ⅰ(1単位)」と2年次履修の「乳児保育演習Ⅱ(1単位)」で構成している。このうち、本研究でとりあげる「乳児保育演習Ⅰ」の授業目標は、乳児保育における基本的な知識を習得し、3歳未満児の発育発達の特徴をふまえて、子ども一人ひとりの個性を尊重する保育について学ぶことである。教授形態は、講義、個人ワーク、グループワーク、発表、実技で構成している。「乳児保育演習Ⅰ」の授業内容を表1に示す。

2. 研究方法

(1) 対象者

指定保育士養成施設の私立A大学で、2017年度前期の「乳児保育演習Ⅰ」を履修した学生69名のうち、本研究への参加同意を得られた67名を対象とした。

(2) データ収集方法

2017年4月～8月に行われた「乳児保育演習Ⅰ」の履修を終えた対象者に、説明書および質問票を配布し、同意の得られた者に対し回答及び提出を求めた。

「乳児保育演習Ⅰ」の教育効果を評価するために、厚生労働省が示している「教科目の教授内容」の「乳児保育」の教授目標(表2)に則

り³⁾、「乳児保育演習Ⅰ」の内容に沿って筆者が作成した「乳児保育演習Ⅰ教育効果質問票」を用いた。質問内容は、「1. 授業の学習内容について(5問)」、「2. 本授業の学習効果について(2問)」、「3. 本授業の内容(カリキュラム)について(9問)」、「4. 将来について(1問)」の計17問で構成されている。回答方式は、「1. 授業の学習内容について(5問)」、「2. 本授業の学習効果について(2問)」、「3. 本授業の内容(カリキュラム)について(前半5問)」までは、5件法(大いにできた[大いに思う]～全くできなかった[全く思わない])を採用した。また、「3. 本授業の内容(カリキュラム)について(後半4問)」については、授業内容(講義、個人ワーク、グループワーク、発表、実技)を選択肢とし、そこから該当する回答1つを選択する択一回答方式を採用した。更に、「4. 将来について(1問)」については、業種候補(保育所、幼稚園、福祉施設、一般企業、わからない)を選択肢とし、そこから該当する回答1つを選択する択一回答方式を採用した。また、全ての設問に対し、自由回答方式にて選択肢を選んだ理由や意見の記載を求めた。

(3) データ分析方法

質問票より得られたデータに対し記述統計を行い、各設問への回答数とその回答割合を算出した。回答割合は有効回答数に対する割合(%)を算出するものとする。理解を深めることへの有効性、及び将来への役立つ可能性に関して、授業内容間でその選択された率の比較を行うため適合度検定を行い、選択された授業内容に有意性があるかを検討した。更に、希望職種別に

集計を行い、群間比較は順序名義尺度項目（5件法による回答項目）にはMann-WhitneyのU検定を、名義尺度項目（択一回答による項目）にはFisherの正確確率検定を用いた。全ての検定において、両側検定にて $P < 0.05$ を統計学的に有意とした。統計解析は、SPSS ver23.0 (IBM Japan, Ltd., Tokyo, Japan) により行った。

(4) 倫理的配慮

対象者に対し、研究の目的・方法・内容・研究参加についての自由の保障と内容の守秘、個人特定を避けることに関する配慮、辞退してもその後受ける教育や成績に影響がないことについて記した書面を配布し、口頭で説明した。質問票は、内容が特定できないように表紙をつけた自記式無記名とした。回答の提出は、異なる場所に設けられた回収ボックスに各自が提出する方法をとり、参加の自由意思を担保した。本研究への参加同意判定は、質問票の提出をもって行った。回収した質問票および集計データは施錠した保管庫で管理し、情報の漏えいがないように注意した。

3. 結果

(1) 対象者と回答状況

質問票の提出は67名（97.1%）であった。そ

のなかで大学1年生が65名、2年生が2名であった。また、男子学生が4名、女子学生が63名であった。提出された質問票のうち、5名は回答の記載が無く、2名には全ての設問に対し、全て同じ回答番号が選択されていた。以上合計7名は無効回答票とし、最終的な有効回答数は60名であった。

将来の希望職種は、保育所が23名（38.3%）、幼稚園が20名（33.3%）、福祉施設が1名（1.7%）、一般企業が5名（8.3%）、そしてわからないが11名（18.3%）であった。

(2) 授業の学習内容、学習効果について

「1. 授業の学習内容について」の回答を表3に示す。全ての設問において、「大いにできた」「できた」までの回答が90%を超えていた。ただ、「3歳未満児の発育・発達の特徴を学ぶことができた」及び「3歳未満児の健やかな成長を支える生活と遊びについて学ぶことができた」の設問においては、「大いにできた」の回答が60%を超えているのに対し、それ以外の設問では「大いにできた」の回答が50%未満であり、学習度に差異がある傾向が認められた。「2. 本授業の学習効果について」の回答も表3に示す。本設問においては、1例を除き全例が「大いにできた」もしくは「できた」と回答をしており、特に80%以上が「大いにできた」と回答をしている。

表3 アンケート調査の回答状況

質問内容と回答	有効回答数	n . %
1. 授業の学習内容について	60	
1) 乳児保育の理念と歴史の変遷及び役割等について学ぶことができた	60	
1_大いにできた (大いに思う)		19 . 31.7
2_できた (思う)		35 . 58.3
3_どちらともいえない		5 . 8.3
4_できなかった (あまり思わない)		1 . 1.7
5_全くできなかった (全く思わない)		0 . 0.0
2) 乳児保育の現状と課題について学ぶことができた	60	
1_大いにできた (大いに思う)		27 . 45.0
2_できた (思う)		29 . 48.3
3_どちらともいえない		3 . 5.0
4_できなかった (あまり思わない)		1 . 1.7
5_全くできなかった (全く思わない)		0 . 0.0
3) 3歳未満児の発育・発達の特徴を学ぶことができた	60	
1_大いにできた (大いに思う)		39 . 65.0
2_できた (思う)		21 . 35.0
3_どちらともいえない		0 . 0.0
4_できなかった (あまり思わない)		0 . 0.0
5_全くできなかった (全く思わない)		0 . 0.0

4) 3歳未満児の健やかな成長を支える生活と遊びについて学ぶことができた	60	
1_大いにできた(大いに思う)		38, 63.3
2_できた(思う)		22, 36.7
3_どちらともいえない		0, 0.0
4_できなかった(あまり思わない)		0, 0.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
5) 乳児保育における保護者や関係機関との連携について学ぶことができた	60	
1_大いにできた(大いに思う)		25, 41.7
2_できた(思う)		35, 58.3
3_どちらともいえない		0, 0.0
4_できなかった(あまり思わない)		0, 0.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
2. 本授業の学習効果について		
1) 保育について学習する上で、効果的な授業であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		50, 83.3
2_できた(思う)		9, 15.0
3_どちらともいえない		0, 0.0
4_できなかった(あまり思わない)		1, 1.7
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
2) 今後、保育所実習に臨むにあたり役に立つ内容であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		50, 83.3
2_できた(思う)		10, 16.7
3_どちらともいえない		0, 0.0
4_できなかった(あまり思わない)		0, 0.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
3. 本授業の内容(カリキュラム)について		
1) 「講義(教員からの講話)」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		37, 61.7
2_できた(思う)		21, 35.0
3_どちらともいえない		2, 3.3
4_できなかった(あまり思わない)		0, 0.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
2) 「個人ワーク」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		25, 41.7
2_できた(思う)		28, 46.7
3_どちらともいえない		5, 8.3
4_できなかった(あまり思わない)		2, 3.3
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
3) 「グループワーク」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		33, 55.0
2_できた(思う)		19, 31.7
3_どちらともいえない		3, 5.0
4_できなかった(あまり思わない)		4, 6.7
5_全くできなかった(全く思わない)		1, 1.7
4) 「発表」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		23, 38.3
2_できた(思う)		29, 48.3
3_どちらともいえない		5, 8.3
4_できなかった(あまり思わない)		3, 5.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
5) 「実技」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	60	
1_大いにできた(大いに思う)		44, 73.3
2_できた(思う)		16, 26.7
3_どちらともいえない		0, 0.0
4_できなかった(あまり思わない)		0, 0.0
5_全くできなかった(全く思わない)		0, 0.0
4. 将来について		
1) 現時点における、大学卒業後の就職先の希望はどれか	60	
1_保育所		23, 38.3
2_幼稚園		20, 33.3
3_福祉施設		1, 1.7
4_一般企業		5, 8.3
5_わからない		11, 18.3

データ表示：n,%(設問回答数/有効回答数).

(3) 本授業の授業形態について

「3. 本授業の内容(カリキュラム)について」の回答を表3に示す。学習内容の理解を深める手段としての各授業の有効度を調査した結果、「講義(教員からの講話)」「実技」において、95%以上が有効だと「大いに思う」「思う」と回答をしていた。

一方、「個人ワーク」「グループワーク」「発表」においては、「大いに思う」「思う」への回答が90%を切り、さらに有効だと「あまり思わない」「全く思わない」の回答が3～9%程度存在することが認められた。

更に、理解を深めることへの有効性、及び将来への役立つ可能性に関して、適合度検定を用い、選択された授業内容に有意性があるかを検討し、その結果を表4に示す。

「学習内容の理解を深める手段として一番有効であった授業内容はどれか」という設問に対し、回答に有意な偏りがあることが示された

($P<0.001$, 適合度検定)。残差を見ると、実技と講義の選択率が高く(54.2%)、個人ワーク(3.4%)と発表(1.7%)の選択率が低い傾向が認められた。

また、「学習内容の理解を深める手段として一番効果が薄いと感じた授業内容はどれか」という設問に対し、回答に有意な偏りがあることが示された($P<0.001$, 適合度検定)。残差を見ると、個人ワーク(35.7%)と発表(39.3%)の選択率が高く、講義(8.9%)と実技(1.8%)の選択率が低い傾向が認められた。

また、「将来、保育に携わるうえで最も役立つと感じた授業内容はどれか」という設問に対し、回答に有意な偏りがあることが示された($P<0.001$, 適合度検定)。残差を見ると、実技(84.5%)の選択率が高く、それ以外の選択率が低い傾向にあった。

最後に、「将来、保育に携わるうえで最も役立つ可能性が低いと感じた授業内容はどれか」と

表4 理解を深めることへの有効性、及び将来への役立つ可能性に関する授業内容間の比較

	回答数	適合度検定	
	n, %	P-value	残差
3. 本授業の内容(カリキュラム)について			
6) 学習内容の理解を深める手段として一番有効であった授業内容はどれか			
1_講義	17, 28.8	<0.001	5.2
2_個人ワーク	2, 3.4		-9.8
3_グループワーク	7, 11.9		-4.8
4_発表	1, 1.7		-10.8
5_実技	32, 54.2		20.2
7) 学習内容の理解を深める手段として一番効果が薄いと感じた授業内容はどれか			
1_講義	5, 8.9	<0.001	-6.2
2_個人ワーク	20, 35.7		8.8
3_グループワーク	8, 14.3		-3.2
4_発表	22, 39.3		10.8
5_実技	1, 1.8		-10.2
8) 将来、保育に携わるうえで最も役立つと感じた授業内容はどれか			
1_講義	9, 15.5	<0.001	-2.6
2_個人ワーク	0, 0.0		-11.6
3_グループワーク	0, 0.0		-11.6
4_発表	0, 0.0		-11.6
5_実技	49, 84.5		37.4
9) 将来、保育に携わるうえで最も役立つ可能性が低いと感じた授業内容はどれか			
1_講義	3, 5.4	<0.001	-8.2
2_個人ワーク	21, 37.5		9.8
3_グループワーク	9, 16.1		-2.2
4_発表	22, 39.3		10.8
5_実技	1, 1.8		-10.2

データ表示：n, % (設問回答数/有効回答数)。

いう設問に対し、回答に有意な偏りがあることが示された ($P < 0.001$, 適合度検定)。残差を見ると、個人ワーク (37.5%) と発表 (39.3%) の選択率が高く、講義 (5.4%) と実技 (1.8%) の選択率が低い傾向が認められた。

(4) 希望職種別の比較

対象者のうち97.0%が大学1年生であり、保育者養成課程における初学者という特性から、希望職種が保育者(幼稚園または保育所)である群と、それ以外(福祉施設、一般企業、解らない)の群とに分け、回答状況に差があるかを検討した。その結果を表5に示す。

その結果、「授業の学習内容(設問1)」「学習効果(設問2)」について、2群間で有意な差は認められなかった (for Mann-Whitney U test)。

また同様に、「授業内容の有効性(設問3:1-5)」についても、2群間で有意な差は認められなかった (for Mann-Whitney U test)。

一方、「学習内容の理解を深める手段として一番効果が薄いと感じた授業内容はどれか」という設問に対し、選ばれた授業内容に有意な群間差を認めた ($P = 0.022$ for Fisher's exact test)。「保育者」群では、「それ以外」群に比べ、「個人ワーク」に効果が薄いと感じる回答が多い傾向にあった(保育者群:46.2%、それ以外群:11.8%)。

また、「将来、保育に携わるうえで最も役立つと感じた授業内容はどれか」という設問に対し、選ばれた授業内容に有意な群間差を認めた ($P = 0.014$ for Fisher's exact test)。「保育者」群では、ほぼ「実技」が選択されたが(92.7%)、

表5 希望職種別([幼稚園 or 保育所]と[左記以外])における回答状況の比較

	幼稚園または 保育所		幼稚園・保育所 以外		P-value
	有効数	n, %	有効数	n, %	
1. 授業の学習内容について					
1) 乳児保育の理念と歴史の変遷及び役割等について学ぶことができた	43		17		0.395
1_大いにできた(大いに思う)	15	34.9	4	23.5	
2_できた(思う)	24	55.8	11	64.7	
3_どちらともいえない	4	9.3	1	5.9	
4_できなかった(あまり思わない)	0	0.0	1	5.9	
5_全くできなかった(全く思わない)	0	0.0	0	0.0	
2) 乳児保育の現状と課題について学ぶことができた	43		17		0.600
1_大いにできた(大いに思う)	19	44.2	8	47.1	
2_できた(思う)	20	46.5	9	52.9	
3_どちらともいえない	3	7.0	0	0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	1	2.3	0	0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0	0.0	0	0.0	
3) 3歳未満児の発育・発達の特徴を学ぶことができた	43		17		0.532
1_大いにできた(大いに思う)	29	67.4	10	58.8	
2_できた(思う)	14	32.6	7	41.2	
3_どちらともいえない	0	0.0	0	0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0	0.0	0	0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0	0.0	0	0.0	
4) 3歳未満児の健やかな成長を支える生活と遊びについて学ぶことができた	43		17		0.891
1_大いにできた(大いに思う)	27	62.8	11	64.7	
2_できた(思う)	16	37.2	6	35.3	
3_どちらともいえない	0	0.0	0	0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0	0.0	0	0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0	0.0	0	0.0	
5) 乳児保育における保護者や関係機関との連携について学ぶことができた	43		17		0.269
1_大いにできた(大いに思う)	16	37.2	9	52.9	
2_できた(思う)	27	62.8	8	47.1	
3_どちらともいえない	0	0.0	0	0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0	0.0	0	0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0	0.0	0	0.0	
2. 本授業の学習効果について					
1) 保育について学習する上で、効果的な授業であった	43		17		0.402
1_大いにできた(大いに思う)	37	86.0	13	76.5	
2_できた(思う)	5	11.6	4	23.5	

3_どちらともいえない	0 , 0.0	0 , 0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	1 , 2.3	0 , 0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
2) 今後、保育所実習に臨むにあたり役に立つ内容であった	43	17	0.099
1_大いにできた(大いに思う)	38 , 88.4	12 , 70.6	
2_できた(思う)	5 , 11.6	5 , 29.4	
3_どちらともいえない	0 , 0.0	0 , 0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
3. 本授業の内容(カリキュラム) について			
1) 「講義(教員からの講話)」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	43	17	0.481
1_大いにできた(大いに思う)	28 , 65.1	9 , 52.9	
2_できた(思う)	13 , 30.2	8 , 47.1	
3_どちらともいえない	2 , 4.7	0 , 0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
2) 「個人ワーク」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	43	17	0.432
1_大いにできた(大いに思う)	19 , 44.2	6 , 35.3	
2_できた(思う)	20 , 46.5	8 , 47.1	
3_どちらともいえない	2 , 4.7	3 , 17.6	
4_できなかった(あまり思わない)	2 , 4.7	0 , 0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
3) 「グループワーク」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	43	17	0.453
1_大いにできた(大いに思う)	25 , 58.1	8 , 47.1	
2_できた(思う)	13 , 30.2	6 , 35.3	
3_どちらともいえない	1 , 2.3	2 , 11.8	
4_できなかった(あまり思わない)	3 , 7.0	1 , 5.9	
5_全くできなかった(全く思わない)	1 , 2.3	0 , 0.0	
4) 「発表」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	43	17	0.646
1_大いにできた(大いに思う)	15 , 34.9	8 , 47.1	
2_できた(思う)	23 , 53.5	6 , 35.3	
3_どちらともいえない	3 , 7.0	2 , 11.8	
4_できなかった(あまり思わない)	2 , 4.7	1 , 5.9	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
5) 「実技」は学習内容の理解を深める手段として有効であった	43	17	0.113
1_大いにできた(大いに思う)	34 , 79.1	10 , 58.8	
2_できた(思う)	9 , 20.9	7 , 41.2	
3_どちらともいえない	0 , 0.0	0 , 0.0	
4_できなかった(あまり思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
5_全くできなかった(全く思わない)	0 , 0.0	0 , 0.0	
6) 学習内容の理解を深める手段として一番有効であった授業内容はどれか	42	17	0.181
1_講義	13 , 31.0	4 , 23.5	
2_個人ワーク	2 , 4.8	0 , 0.0	
3_グループワーク	7 , 16.7	0 , 0.0	
4_発表	1 , 2.4	0 , 0.0	
5_実技	19 , 45.2	13 , 76.5	
7) 学習内容の理解を深める手段として一番効果が薄いと感じた授業内容はどれか	39	17	0.022
1_講義	2 , 5.1	3 , 17.6	
2_個人ワーク	18 , 46.2	2 , 11.8	
3_グループワーク	4 , 10.3	4 , 23.5	
4_発表	15 , 38.5	7 , 41.2	
5_実技	0 , 0.0	1 , 5.9	
8) 将来、保育に携わるうえで最も役立つと感じた授業内容はどれか	41	17	0.014
1_講義	3 , 7.3	6 , 35.3	
2_個人ワーク	0 , 0.0	0 , 0.0	
3_グループワーク	0 , 0.0	0 , 0.0	
4_発表	0 , 0.0	0 , 0.0	
5_実技	38 , 92.7	11 , 64.7	
9) 将来、保育に携わるうえで最も役立つ可能性が低いと感じた授業内容はどれか	39	17	0.021
1_講義	2 , 5.1	1 , 5.9	
2_個人ワーク	19 , 48.7	2 , 11.8	
3_グループワーク	4 , 10.3	5 , 29.4	
4_発表	14 , 35.9	8 , 47.1	
5_実技	0 , 0.0	1 , 5.9	

「それ以外」群では、「実技」(64.7%)とともに「講義」(35.3%)も選択される傾向にあった。

さらに、「将来、保育に携わるうえで最も役立つ可能性が低いと感じた授業内容はどれか」という設問に対し、選ばれた授業内容に有意な群間差を認めた($P=0.021$ for Fisher's exact test)。「保育者」群では、「それ以外」群に比べ、「個人ワーク」に効果が薄いと感じる回答が多い傾向にあった(保育者群:48.7%、それ以外群:11.8%)。

自由記載への回答より、個人ワークへの効果が薄いと感じた理由として、「狭い範囲しか調べられなかった」「自分が調べたところ以外はためにならなかった」「本当のことが分からないから」といった回答が見られた。

4. 考察

(1) 学習内容の理解

本研究は、保育士養成課程における「乳児保育」を教授する上で、その基礎となる「乳児保育演習Ⅰ」に焦点を当て、実際に受講した学生からアンケート形式による聞き取り調査を行うことで、演習科目における教育効果の評価と今後の課題、ならびに教授方法を検討した研究である。

現代の少子化社会において、大学生の年代では実際に乳幼児と接する経験が全くないというケースが多い。これは、A大学にて保育士養成課程を受講する学生であっても見受けられる状況である。そのため、学生らにおいては漠然と乳幼児の姿や行動等を知識としては持ち合わせていても、より具体的な姿や行動については正確なイメージができていないことが指摘されている⁴⁾。

そのような学生らにとって、実習に至る前の「演習」という位置づけにある「乳児保育演習Ⅰ」開始時点では、演習の先にある対象像、即ち乳幼児の十分なイメージが掴めていない状況であり、そのため授業内容を十分に理解できない可能性が推測される。しかしながら、「乳児保育演習Ⅰ」受講後の学習内容の理解度やその学習効果については、約9割が効果的な授業であったと回答をしている。これは、授業内容が学生にとって有意義なものになっていることを

意味し、続く「乳児保育演習Ⅱ」や「保育所実習」へのモチベーション維持に貢献していることが推察される。特に、「3歳未満児の発育・発達の特徴を学ぶことができたか」、「3歳未満児の健やかな成長を支える生活と遊びについて、学ぶことができたか」という設問に対しては半数以上の6割程が、「大いに理解できた」と回答をしている。このように、乳幼児に対して漠然としたイメージを持っていることが多い学生にとって、より具体的な乳幼児像(発育や発達状況、及び生活やかかわり方)が認識できた可能性を示唆しており、「乳児保育演習Ⅰ」の一番大きな効果点であると考えられる。

一方、「乳児保育の理念と歴史の変遷」や「乳児保育における保護者や関係機関との連携」といった学びについては、「大いにできた」という回答は決して少なくはないものの約4割程度にとどまり、先に述べた乳幼児像を掴むといった内容よりは低い傾向にあった。ただし、これらの内容は「演習」という授業内容よりも「講義」という授業形態に依存する部分が多い項目であり、演習を主題とする「乳児保育演習Ⅰ」において、それらの理解度が少なくなる傾向は妥当な結果になっているとも考えられる。

とはいえ、昨今の社会変化を背景に、保育所及びそこで働く保育士の役割が拡大し、保育所保育士にはソーシャルワークを用いた地域の子育て支援が求められるなか⁵⁾、これらの講義が重点となる授業に関しても、何かしら効果的な取り組みを考案することが重要であると考えられる。ただ、それでも効果的であるとの回答(学ぶことができた以上の回答)が約9割に至っている点を加味すると、授業内容全体としては重要な教育課程となっていることが推測される。

(2) 授業形態のあり方

次に、本研究では理解を深めることへの有効性、及び将来への役立つ可能性に関して、具体的にどの授業形態がより効果的であったかを調査した。その結果、「学習内容の理解を深める手段として、一番有効であった授業内容」、「将来、保育に携わる上で最も役立つと感じた授業内容」共に、「実技」を選択した学生が最も多く、「乳児保育演習Ⅰ」において一番効果的な授業

内容となっていることが示された。自由回答で得られた「実技を一番有効と選択した理由」についても、「実際に赤ちゃん人形でおむつ替え等してみることで、理解しているつもりになっていた手順をしっかりと覚え直すことができた」、「実技を重ねる方が理解力は深まる」、「だっこ、おむつ替え、着替えなど、保育士になる上で必ず行うことだから」といった、より具体的な乳幼児像を掴める授業内容になっていることが推測され、この結果は先に議論した「3歳未満児の発育・発達の特徴を学ぶことができたか」、「3歳未満児の健やかな成長を支える生活と遊びについて、学ぶことができたか」という設問に対して、学生の評価が高かった結果とも一致していると考えられる。

一方、評価が低かった授業内容として、「個人ワーク」と「発表」が選出された。自由記載への回答より、「個人ワーク」の効果が薄いと感じた理由として、「狭い範囲しか調べられなかった」、「自分が調べたところ以外はためにならなかった」、「本当のことが分からないから」といった回答が見られたが、これらの根底には、まだ具体的な乳幼児像が十分に掴めていない学生らにとって、ただでさえ不確定な調査像に対し、加えて保育自体への十分な知識がない状況において、独自の力だけを持って調査することの難しさが表面化しているものと推測される。また、各個人がそのような感情を抱きながら行った「個人ワーク」であるからこそ、それらの「発表」という授業形態についても積極的に取り組めず、効果を薄く感じる授業として挙げられている可能性が考えられる。これは自由回答からも見て取ることができ、「他人の調査では本当のことがわからないから」、「調べた内容以外では、聞くだけで飽きてしまう」といった回答が見受けられた。

これらの問題は、講義・演習を含めた「乳幼児の養護と教育に関わる科目」を教授するうえで重要な今後の課題であり、個人ワークの結果が科学的根拠に基づいた内容となること、且つ自己満足で終える発表ではなく、相手主眼となるプレゼンテーションを行えるような授業運営の検討が必要であろう。香川らは、発表すること全般を、「価値ある情報を他者に伝達するプ

レゼンテーション」と定義し、伝達する力とされるコミュニケーション能力を育成する教育方法であると述べている⁶⁾。保育者は、自らの保育の考え方や保育の実際を、様々な場面で表現することが不可欠であり、保育者に求められる発表能力は、保育実践力そのものでもあるといえる。もちろん、その前提には発達段階に関する理解等、保育の専門性も求められるため、「講義」を含めた基礎教育の充実化を図り、「個人ワーク」であっても、学生が後の「発表」にて相互の啓発性が高い状況をイメージ・実現でき、興味関心を抱くような方針を組み込むことが、今後の目標になると考えられる。

(3) 希望職種別での授業への取り組み方

さらに、将来の希望職種別での回答の違いについて検討したい。授業の学習内容の理解度や、有効と感じる度合いについては大きな差異は無く、「乳児保育演習Ⅰ」自体の意義は、全ての学生に対し肯定されていることが示唆された。しかしながら、「将来、保育に携わる上で、最も役立つと感じた授業内容はどれか」という設問に対しては、希望職種間でその選択に有意な差が認められ、幼稚園・保育所を希望する者ではほぼ全員が「実技」を選択したが、福祉施設や一般企業を希望するものは約6割が「実技」、残り4割が「講義」を選択した。これは、より具体的な乳幼児像を掴む必要があり、また自身もその必要を切に感じている幼稚園・保育所希望の学生にとっては、「演習」という科目において、実技に対する期待が大きく、またそれをかなえられている授業であるからこそ、ほぼ全員が「実技」と回答していると考えられる。

しかしその一方で、福祉施設や一般企業を希望する学生にとっては、実際の就職先の業務としても具体的な乳幼児像を掴むことよりは、「乳児保育の理念と歴史の変遷」や「乳児保育における保護者や関係機関との連携」といった知識が重要であるという認識があり、それらをより学べる「講義」を選択したものと推測される。即ち、学生らは自らにとって必要な課題というものを把握しており、その内容を「乳児保育演習Ⅰ」から吸収しようという意気込みを持っており、それに伴い実際の学習効果が得られてい

ると考えられる。

(4) 研究の学びと今後の課題

以上より、本研究の対象科目である「乳児保育演習Ⅰ」は、乳幼児の具体的なイメージを持っていないことが多い学生にとって、それらを学ぶことができる科目であり、同時に将来の希望職種に合わせ、必要な知識を十分に得ることができる授業内容となっていることが示唆された。これは「乳児保育」の学習方法の1つとしての「演習」という形態において保育実践力の育成が求められるが⁷⁾、「乳児保育演習Ⅰ」は保育実践力の3つの力として定義される要素(指導計画を作成する力、保育を展開する力、保育実践を省察し今後の課題をもつ力)の全てに対し⁸⁾、その基礎の育成に貢献できているものと考えられる。

さらには、後に続く「乳幼児の養護と教育を継続して教授する科目」において、より具体的に保育実践力が身につく、後の「保育所実習」にてその成果が実ることが期待される。

今後の課題として「個人ワーク」や「発表」について授業目標や内容・構成等についても再検討し、学生の肯定的な取り組みや主体的学びが促進される授業作りを行い、授業内容全体が有意義なものになるようにしたい。また、研究方法として、普遍的な授業形態による学習効果の違いを見出す取り組みや、学生の主観的な判断のみではなく実証的な評価を用いた検討が必要であると考えられる。

最後に、今後の研究の展望としては、「乳児保育演習Ⅰ」の次年度に行われる「乳児保育演習Ⅱ」において、改めて調査を行うことで、「乳児保育演習Ⅰ」での学習効果の確認、及び「乳児保育」全体を通して、如何に厚生労働省の推奨する「教科目の教授内容」の意義を満たす授業となっているかを総合的に検討したいと考える。その結果を踏まえ、保育士養成課程改定後の「乳幼児の養護と教育に関わる科目」の教授方法立案の参考としたい。

【謝辞】

本研究を行うにあたりご協力くださいました対象者と関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 恩恵財団母子愛育会愛育研究所、日本子ども資料年鑑2017、「KTC中央出版」(2017)
- 2) 厚生労働省子ども家庭局保育課、保育所等関連状況取りまとめ(平成29年4月1日)(2017)、<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000176121.pdf>(2018/9/25)
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局、指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について、(2017)、<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000108972.pdf>(2018/9/25)
- 4) 小屋美香、保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究、「育英短期大学研究紀要」、Vol.27, pp33-44, (2010)
- 5) 松本しのぶ、保育士に求められるソーシャルワークとその教育の課題—地域子育て支援をめぐる動向から—、「奈良佐保短期大学研究紀要」、Vol.15, pp65-75, (2008)
- 6) 香川晴美、鈴木正和、伊藤潔志、保育者の専門性としての発表能力とその育成—「保育・教育実践演習」を核とした科目連携に向けて—、「山陽学園短期大学紀要」、Vol.44, pp8-18, (2013)
- 7) 工藤恭子、乳児保育演習における「保育実践力」育成に関する研究、「北海道文教大学研究紀要」、Vol.37, pp97-107, (2013)
- 8) 山田秀江、幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察—責任実習の実践報告から—、「四条畷学園短期大学紀要」、Vol.45, pp53, (2012)

